

海外報告

カリフォルニア大学デイビス校での文部省在外研修を終えて

服部 昭仁
北海道大学

95年2月20日、抜けるような青空の中をサンフランシスコから15人乗りのプロペラ機でサクラメント空港に到着した。20度以上の暖かきで翌日からの生活の快適さが想像され、時差ボケも吹っ飛んだ感じであった。空港には10カ月間お世話になるLab.のprofessorが迎えにきてくれた。目的地であるカリフォルニア大学デイビス校の所在するデイビス市は、サクラメント空港から西方向（サンフランシスコ方向）に車で約20分走ったところに位置する北カリフォルニアの小さな大学町である。大学しかないこの町は治安の良さは米国一といわれ、down townにもhomelessは皆無である。反面、レストラン等も少なく単身の私にとっては生活のしづらい面もあった。西海岸からやや内陸に入ったこの地方は、従来10月から3月位までは雨期になり、雨が多くなる。しかし、95年は地球の異常気象がこの地方にも当てはまり、すべてが例年とは違っていた。私の到着日の2月20日はこの時期には珍しく暑い日で雨期終了を思わせる1日であった。しかし、好天はこの日1日で翌日からは連日の雨、3月には記録的な大洪水となり、キャンパスの内外至る所に池、湖が出現した（到着時、空港からデイビス市に至る国道の両側の畑も水浸しで大湖と化していた）。雨期は5月いっぱい続き、5月の雪、6月はじめの雹を含めた大雨（この時も洪水、一般に排水が良くないという印象）を最後に雨があがった。いよいよ夏到来、カリフォルニアの抜けるような青空の下、気温はぐんぐん昇り、日中の最高気温は毎日36—42度となり、北国育ちの私にとっては厳しい気候であったが、湿度がきわめて低いことと夜には急激に気温が下がることによって予想していたほど体に応えなかった。きつかったのは、室温と外気温の差が大きいことであった。これには体の方がなかなか適応してくれず閉口した。この期間、週末のアパートのプールサイドには老若男女を問わず、日光浴する人が多くその光景は一人暮らしの私にとっては目の良い保養になった。10月、11月になってもいっこうに雨が降らず、空は雲1つ見あたらず、これも記録的とのことで干ばつが心配されたが11

月の末になってやっと雨が降り、12月、私の帰国直前には大雨で再度洪水となり、出発時には大学の農場の大甫場も春先と同様湖と化していた。

さて、私の所属したデパートメントはFood Scienceだったが、研究テーマは主要な筋肉蛋白質の1つであるミオシンの変異体が大腸菌に発現させ、その性質を調べるものであり、畜産学とは直接つながらなかった。分子生物学的実験手法は全く知らず、言葉の不自由な中で新しい分野への挑戦で多少臆する所もあったが、案ずるよりは産むが易し、で周囲の人たちの親切な指導と助言でそれなりの成果を上げることができた。しかし、10カ月間は1つの研究を完結するには短く、やり残したこともあり、今後継続して共同研究の形で進めることになった。

10カ月間の滞在を通して、何よりも良かったことはあらゆる雑用から解放されて実験のみに集中できたことである。加えて、多くの外国人と接触できたこと、日本では知り合う可能性の低い自分の専門分野と異なる日本人研究者と親しくなれたことも大きな財産である。もう1つ、長期の夏休みをとって家族とともにカリフォルニアをエンジョイできたことも大きい。単身で出かけた私を追って夏休みを利用した家族がやってきて3週間滞在した。長期の夏休みは初めての経験であったが、精神的にrefreshされ、秋からの研究生生活が活性化されたように思われる。ある程度の長期の夏休みは殆どすべてのスタッフがとっており、皆それぞれにrefreshされているように見受けられた。日本ではなかなか難しいだろうができる限り休むこともその後の研究を活性化させる上で有効であると思われる。

デイビス校は数あるカリフォルニア大学のなかでも農学が特に優れている分野の1つである。しかし、私のかの地での所属先、研究内容は農学あるいは畜産学とはかなり隔たった所に位置し、本学会の会員の皆様には有用な海外報告ができないことを申し訳なく思っている。この10カ月間、体験してきたすべてのことを私の今後の研究・教育活動に最大限還元していくよう努力することを約束して海外報告としたい。